

原初的アメリカ研究者としての鶴見祐輔

中嶋啓雄

はじめに——第1次世界大戦後の文化国際主義の開花とアメリカ研究

ウィルソンの国際主義（自由主義的国際主義）の文化的側面としての「文化国際主義」の開花 cf. 文化国際主義：「国境を越えた文化的活動によって国際交流を深めようとした国際主義」（入江『権力政治を超えて』5頁）

主要な担い手

国際連盟の下に置かれた知的交流委員会（ジュネーブ）（ユネスコの前身）やイギリスの王立国際問題研究所（Royal Institute of International Affairs、通称チャタムハウス）、アメリカ合衆国の外交問題評議会（Council on Foreign Relation）と並び、アジア・太平洋地域の国際NGOの先駆、太平洋問題調査会（Institute of Pacific Relations〔IPR〕）の日本^{カウンスル}支部の中枢を担った「新渡戸宗の使徒」もその一つ

知的交流委員会日本代表を務めた新渡戸稲造の論考「米国研究の急務」『実業の日本』（1919年4月）

I. 「新渡戸宗の使徒」としての鶴見

新渡戸宗の使徒

第一高等学校（一高）（現・東京大学教養学部）の在校生ないし卒業生として後に国際連盟事務次長（1920～26年）を務めた校長（1906～13年）・新渡戸稲造に指導を仰いだ人々。太平洋問題調査会（IPR）日本^{カウンスル}支部の中枢にあって、原初的アメリカ研究者集団を形成。鶴見を筆頭に前田多門（国際労働機関〔ILO。連盟脱退（1933年）後、国際連盟保健機関（League of Nations Health Organization）と並び、日本が加盟し続けた唯一の国際機関〕日本政府代表〔1923～26年〕、^{ジャパン・インスティテュート}日本文化会館〔ニューヨーク〕館長〔1938年～太平洋戦争勃発直後〕、高木八尺（東京帝国大学法学部「米国憲法、政治及外交」〔ヘボン講座〕講座〔1918年開設〕

初代講師)、蠟山政道(日本における行政学の草分け cf. 欧米〔特にイギリス〕留学〔1925~27年〕)、またその系譜に直接連なる人物として松本重治(米欧留学〔1923~27年〕、第3回IPR会議(於・京都、1929年)に書記として出席)

鶴見(1885~1973年): 官吏を経て、文筆家・政治家

カーネギー国際平和基金の後援による「日米交換教授」としての新渡戸の講演旅行(1911~12年)に秘書として随行。1916年、ウィルソン大統領再選に際して、一高弁論部後輩の蠟山や北岡寿逸(日本政府代表・帝国代表事務所長〔1936~38年〕)と共に火曜会(英名:ウィルソン倶楽部。幹事:北岡。少年時代よりアメリカで苦学した外交官出身の満鉄副総裁・松岡洋右、前世紀末、『ネーション』誌を模した『国民の友』誌を主宰していたジャーナリスト・徳富蘇峰らが講演)組織。著名なアメリカ史家・政治学者チャールズ・A・ビアードの招へいや排日移民法通過後の北米講演旅行といった1920年代~30年代の民間外交に貢献→アジア・太平洋戦争にかけての戦争協力。アメリカについての主著『現代米論』。長女・和子、長男・俊輔——それぞれ社会学者、哲学者として戦後を代表する知識人として活躍——のアメリカ留学(1930年代後半~太平洋戦争勃発直後)。Cf. 姪の石本(後の加藤)シズエ:マーガレット・サンガーの知遇を得て、産児制限運動を展開。

II. ビアードの招へいと原初的アメリカ研究者集団の形成

義父・後藤新平の東京市長就任(1920年末)に伴って、長期米欧出張(1918年9月~1921年4月)中、知己を得たビアードの助言に基づき、ニューヨーク市政調査会で市政改革について調査

帰国後、東京市政調査会を創設する後藤の意向でビアードを招へい(1922年2月頃)→妻で歴史家のメアリー・リッターや長男、長女を伴い訪日(1922年9月~1923年3月)。関東大震災直後、後藤の要請で再来日(10~11月)

◎フロンティア学説で知られるF・J・ターナーと並ぶ革新主義史学の双璧で、20世紀前半のアメリカを代表する知識人でもあったビアードとの親密な交友

・訪日時の家族ぐるみの付き合い:和子のひな祭りパーティーへの夫妻招待、和子・俊輔への夫人からのプレゼント

・北米講演旅行(1924年8月~25年11月)

コネチカット州ニューミルフォードのビアードの山荘に度々滞在(合わせて3か月程)し、講演原稿を作成。互いにJeff、Muttのあだ名で呼び合う

…→その後、最後となる6回目のアメリカ講演旅行(1935年)まで往復書簡
・ビアード没(1948年9月1日)後の夫人との交友の復活:戦後初めての訪米に際して、鶴見、夫人の双方が再会を囑望

⇒東京大学を中心とした原初的アメリカ研究者集団の形成

鶴見、東京市第三助役の前田、「ヘボン講座」開講のための留学から帰国した際、訪日中のビアード夫妻の知己を得た高木、ビアードの行政学から学んだ蠟山、留学中、鶴見の紹介でビアードを師と仰ぐようになる松本ら

⇔×主著『合衆国憲法の経済的解釈』(1913年)等の史学史上の重要性

III. 鶴見とアメリカ

海軍軍縮条約(於・ワシントン会議〔1921~22年〕)

「世界民衆の要望が、潮の満つるように寄せてきた」『欧米大陸遊記』357頁

北米講演旅行←排日移民法(1924年の移民法)

1920年代の英語圏の国際政治論議の中心でIPRの一連の国際会議が模倣したウィリアムズタウン政治協会(於・ウィリアムズ大学、8月)での諸講演、かつて勤務したビアードの紹介による当時の文化国際主義を反映したコロンビア大学寄付講座での6回の講義(10月)を皮切りに、その後、やはり、ビアードの紹介でカーネギー平和基金の助成を得て、37大学をはじめ100余りの場所(カナダを含む)で150回を超える講演。末期には第1回IPR会議(於・ホノルル)にも出席。

「米国魂——即ち公正の精神と、正義の真情」(ウィリアムズタウン政治協会における最後の講演での言葉)『北米遊説記』73頁

「日米両国の戦争の如きは、愚昧、無益、であって其の災害たるや無限である」(コロンビア大学での初回の講義)同147頁

「太平洋時代の到来とともに、日本は世界的日本として誕生しなければならぬ……その新日本の大切なる相手は、対岸の米国である……我々が米国に知られ、米国を知ることの必要」同、序

Cf. 『北米遊説記』:1934年、日米学生会議を創設する中山^{きみたけ}公威への感化

『現代米国論』(1931年):「機械文明」の拡大を通じた「世界のアメリカ化」

←「貴方のようにアメリカを真に理解している日本人はほとんどいない」(鶴見宛ビアード書簡〔1925年5月23日〕、鶴見文書)

IV. 自由主義者としての限界

民主主義への疑念

「デモクラシーの大いなる欠陥の一つを、私は亜米利加において痛感した」＝「誤った『平等』の思想」（建国期のアメリカ社会で重要な位置を占めたキリスト教の衰退に伴って、次第に拡大）、「亜米利加のように男女間の作法が、あまりに形式的になり、動脈硬化症をおこしている国」（cf. 合衆国憲法第 19 修正による婦人参政権の確立）、「デモクラシーの中に、英雄精神が死んでいった」、「近代デモクラシーの廃頹と動揺」『欧米大陸遊記』3 巻「欧州の巻」3 章「^{ベルリン}伯林の夏」1 節「デモクラシーの行方」・2 節「狐と鶏」、巻末言「祖国に帰りて」

⇒独伊のファシズムへの関心

ヒットラーの大演説会出席（1932 年 7 月 28 日）、同 3 章 6 節「ヒットラー」；「どうかしてヒットラーに会いたい」、ナチス宣伝相ゲッベルスに面会（1932 年 8 月 24 日）（同、5 章「^{ウィーン}伯林から維納へ」1 節「地から沸いた英雄児」

アジア・太平洋戦争期：翼賛選挙（1942 年）への出馬、翼賛政治会・大日本政治会総務
⇔俊輔（1937～42 年〔15～20 歳〕。ミドルセックス・スクール、ハーヴァード大学卒業。
後見人：著名なアメリカ史家アーサー・M・シュレシンジャー・シニア〔ハーヴァード大学〕）、和子（1939～42 年、ヴァッサー大学）のアメリカ留学

占領下の公職追放（1946 年 1 月～1950 年 10 月）⇔知米派

「従来……国際協調を主張し、自由主義を宣伝して来たものであり、殊に日米問題の平和的解決のためには三十余年の人生を捧げ来った者であります」（追放解除を求める訴願申請書）

結びに代えて

北岡の評価：「鶴見祐輔さんの思い出」『友情の人……』所収

※小課題：知米、親米、嫌米等、戦後、覇権国となったアメリカに向き合う姿勢には様々な呼称がありますが、あなたは鶴見の対米姿勢をどのように呼べると思いますか。また、そう考える理由を記して下さい。

参考文献

未刊行史料

鶴見祐輔関係文書、国立国会図書館憲政資料室

Charles and Mary Beard Papers, Roy O. West Library, DePauw University, Greencastle, IN.

鶴見自身の著作、その家族に関する著作、追悼集

北岡寿逸編『友情の人鶴見祐輔先生』北岡寿逸、1975年

『思想の科学』37号（1996年2月）特集「鶴見和子研究」

鶴見俊輔『期待と回想——語り下ろし伝』朝日文庫、2008年〔原著1997年〕

鶴見俊輔・加藤典洋・黒川創『日米交換船』新潮社、2006年

鶴見祐輔『北米遊説記』大日本雄弁会講談社、1927年

鶴見祐輔『現代米論』日本評論社、1931年

鶴見祐輔『欧米大陸遊記』大日本雄弁会講談社、1933年

鶴見祐輔（一海知義校訂）『正伝 後藤新平』全八巻、藤原書店、2004～06年

前田多門・高木八尺編『新渡戸博士追想集』故新渡戸博士記念事業実行委員、1936年

著書・論文

伊藤隆『大政翼賛会への道——近衛新体制』講談社学術文庫、2015年〔原著1983年〕

上品和馬『広報外交の先駆者・鶴見祐輔 一八八五——一九七三』藤原書店、2011年

北岡伸一「戦前のILOと北岡寿逸」『ワークアンドライフ：世界の労働』44号（2019年）、31～37頁

鈴木麻雄「鶴見祐輔の対米観——移民問題を中心として」『法学政治学論及』6号（1990年9月）、191～216頁

中嶋啓雄「戦間期文化国際主義と『新渡戸宗の使徒』」秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育——日本史と世界史のあいだで』大阪大学出版会、2020年所収

——「チャールズ・A・ビアードと日米関係——国際主義と孤立主義」『EX ORIENTE』15巻（2008年）、119～135頁

——「歴史的視座から見たアメリカ学会」『アメリカ研究』別冊 50周年記念特別号（2016年）、11～25頁

——「高木八尺と戦後の知的交流の再生——アメリカ研究との関連を中心に」『アメリカ太平洋研究』22号（2022年3月）、29～36頁

藤野正「昭和初期の『自由主義者』——鶴見祐輔を中心として——」『日本歴史』415号（1982年12月）、62～77頁

Akira Iriye, *Cultural Internationalism and World Order*, Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press, 1997 [入江昭（篠原初枝訳）『権力政治を超えて——文化国際主義と世界秩序』岩波書店、1998年].